

# 第14回

## 秀麗富嶽十二景写真コンテスト

### 入選作品

最優秀賞

荒れる富士

三浦 義朗（埼玉県入間郡）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

題名が少々作品にそぐわないが、この場合には「烈風に明ける」か「富士黎明・風強し」という表現が良い。この条件では、快晴であるから荒れるという表現は間違いとなる。しかし、いずれにしてもすばらしい富士山である。山頂部に当たった色づきの光と前景の雲のみの単純化された画面は、これ以上の作品にはなかなか撮れまいと思わせるほどだ。左手下部に小さくとも雲の塊が欲しいが、これは無いものねだりだろう。構図・色調・品格の三者がみごと揃い踏みといったところ、なかなか表現しにくい躍動感もまた得がたいものと言える。

推薦

幽玄富士 小谷 哲朗（三重県松阪市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

前景に市街地が入ってなかなか撮りにくい岩殿山から、このような美しい富士山が撮影できるとは、と思わず驚く。最優秀賞と甲乙つけ難いが、「幽玄富士」という題名どおり静寂の中に端座するため、やや力に欠けた点だけが惜しい。構図的にはむしろ最優秀賞よりも整っているといえ、これまたこれだけの富士山作品は以後も少ないだろうと思う。撮影者の心情が画面中に満ち満ちているかにも思える秀作である。これも数多くこの山に通った賜であり、自然からの贈りものと云えるかも知れない。

推薦

暗雲流れ行く

天野 昭吾（山梨県大月市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

さすが、昨年度の最優秀作者の面目躍如、といったところ。がっちり画面に収めた富士は堂々として王者の風格がある。富士山頂上の空、手前の山体とのバランスも良く実にみごとだ。笑う富士、怒る富士、すねる富士、哀しむ富士が富士の様々相というなら、この作品はまさに怒れる富士と言ってよい。やや惜しむらくはピントが少し甘い。PLのせいか、強風のためのブレか、あるいは引伸ばしの際のミスかとも思われる。もう一度、引伸ばした作品を見てみたいものだ。

特選

雲海上に聳える

高橋 利延（神奈川県相模原市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山からの展望は、真木沢右岸から三ツ峠山にかけて重なり重なり、畳なわって、十二単衣とたとえられる山ひだの美しさがある。それに加えて、そのしめくりに富士山がある、ということが売りものになっている。ところがこの作品はその山ひだから湧き昇って手前の山体を全て隠した雲海がテーマであり、富士山はその上に六合目からの山姿をのぞかせている。意表をついた雁腹の富士山、とでも言おうか。このポジションの新しい見方がまたひとつ出現した。



特選

梅雨の晴れ間

山崎 勝孝（神奈川県藤沢市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

実にさわやかな画面である。青々とした新緑に残雪の富士、何のてらいもなくただ感ずるまま無心にシャッターを切ったことが如実にわかる好作品である。作者は昨年、初めて入選されたが、それより一段と腕を上げたことがうかがえる。三段階に遠く重なり合う前景の山、そして最後に高く富士山が立つ。左方から湧き昇るガスの形が画面の動きを作り出して、初夏の表現にプラスした。画面のバランスとして、右方を少し切ると、右手のガスが減ってずっと良くなる。

特選

紅彩に染まる 筒井 章（静岡県伊東市） 清八山



白簾史朗氏講評

清八山からの富士山は、カメラポジションが少ない上、明るくなってしまうと下部の林道が作画の邪魔をするのでなかなか上手くいかない。この作品は手前の樹枝に付いた霧氷でうまくそれを隠している。この手法は二重に役に立って左奥に位置させた富士山と霧氷だけの画面単純化となり、それに朝の光が花を添えた。少々気になるのは手前の霧氷が少しピントが甘いことと題名(修正済)に「紅彩・・・」(べにさい)とルビが振ってあるが、もっと文法、読みを勉強する必要がある。



入賞

紅陽射す 天野 昭吾（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

最優秀賞の三浦氏の作品と同様の構図取りであるが、構図だけの点に関しては、こちらの作品の方が雪が左方に大きくのびた点で整っている。PLフィルターを使用している。そのため色調に濁りが出て、朝の光のさわやかさが減じた。惜しいと思う。さらに左方を少し切る、というより、カメラアングルを右に向けて、富士山の左裾を少し短くした方がより整ってくる。本年も氏はダブル入選を果たしているが、これも熱意と精進がもたらした結果である。



入賞

静寂

八巻 長子（山梨県中央市）

姥子山



白簾史朗氏講評

やわらかく美しく、いかにも女性的な富士山である。紅(くれない)色の中間調がよくのびているので硬さがなく、それに長時間露光(データでは4分の1秒となっているが実際にはもっと長いではないか。雲の動きでわかる。)効果が加わったの調子である。惜しいことに富士山頂が画面中心線に位置しているので、これを左右どちらかに寄せる必要があった。他の姥子山からの作品が4点しか無かったため有利となったが、いつもそうはいかない。テーマモチーフを画面中心線に置くというクセを一日も早く匡正することが大切。

入賞

晩秋の朝 谷口 一只 (埼玉県加須市) 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

6点しかない牛奥ノ雁ヶ腹摺山の作品中、もっとも色調もよく構図も整っていた。作者は過去何回か応募しているが、いつも惜しいところで入選を逸していた。この条件的にあまり良好といえない2番山頂でこれだけの作品を出品できたのは不断の努力が実を結んだとはいえ、今後はさらに期待できそうである。一番手前の影だけが不要であるが、光の当たった部分の色彩は美しく、新雪がなく、そのためあまりにもコントラストがなく冴えない富士山が手前の紅葉の鮮やかさによって生かされている。

入賞

初冠雪と紅葉

村上 敏幸（山梨県大月市）

小金沢山



白簾史朗氏講評

小金沢山も牛奥ノ雁ヶ腹摺山同様、前景とする岩塊も、紅葉する樹種も少ないので、まことに撮りにくい。そのためか、今回はこの村上氏の一点だけの応募であり、自動的に入選となった。とって、作品的に劣るものを入選させることは極力避けるので、一応のレベルに達していることになる。欲をいえば（出来得れば）、カメラポジションをもっと右に寄せて、紅葉の葉むらをもっと大きく、そして左方に移す方がよかった。左方の黒い空間がそれで埋まり構図が整ってくる。



入賞

静寂の中に 高津 秀俊（山梨県大月市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

よく整った美しい画調の作品である。このところ、選者が雪の大蔵高丸の作品を発表してから、とみにこのポジションからの富士山が増えた。今回もこの3番山頂からの作品が31点と多く、38点の雁ヶ腹摺山に次いでいる。ピントもよく、調子もよく、31点中では第一の作品であったが、残念なことに上位6点に比較して力不足の感が否めない。それは雪の積もったササ原が、もっとも手前にあって、構図上、全体を平板的に弱くしているからである。ただし、これももっと近寄って質量の逆転を図り、手前を強くすればその限りではない。



入賞

ミツバツツジ咲く

夏目 政俊 (愛知県豊橋市)

ハマイバ



白簾史朗氏講評

典型的な「いの字」「この字」構図での作画であり、安定した画面となっている。手前左に大きく入れ込んだトウゴクミツバツツジの花むらで画面の2分の1を埋め、残りの右上半部に残雪の富士を持って行く形は、見慣れてはいても、やはり一番安心して見ることができるものだ。ツツジの花色は正常な発色であるが、富士山が少し露光オーバー気味で調子が弱い。おなじR Pプリントでも一段高級なクリスタル紙を使用すると、こうしたところも是されて有利となる。

入賞

早春の空に 帯金 晃（静岡県沼津市） 滝子山



白簾史朗氏講評

こうした場合の「・・・空高く」は、空高く雲がたな引く、という意味と、早春の空が高く展けている、というふたつの意味を持つ。作者の最初の題名は「早春の空に」であり、これでは、空高く雲が浮いている、という意味しかなく、富士山が忘れられている。それにこうした題名は日中の青と白の世界の中でいうことであり、富士山がまだ色づいている時間帯には使わない。富士山を下方に、雲を入れた空を大きく入れて作図したが、これでもまだ空が軽すぎて、上下のバランスが悪く、下方が重くなっている。



入賞

初冬の紅葉

瀬沼 茂雄（東京都福生市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

笹子雁ヶ腹摺山の応募作品5点、その中から1点が推薦に入ったため、残り4点が候補となり、この作品と決定した。題名も最初は「初冬の紅葉」であったが、それでは適当でないので上記に変えた。フィルム(フォルティア)の発色特性のせい、異常にコントラストが強く、紅葉の色が背景に融け込んで暗い点が不満であったが、きちんと引き伸ばせば大丈夫と思われる。全体として少々窮屈な構図であり、ゆとりが感じられない点が今後の課題となろう。氏の入選は久しぶりなので、今後はずっと継続させてほしい。

入賞

晩秋に富士高し 桜井 良樹（東京都青梅市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

氏は初応募で初入選である。奈良倉山はアプローチは良いが、富士山との距離が遠いので意外とまとめにくいきらいがある。この作品はホースマンVHで、210ミリレンズとあるが、フィルムサイズの記入がない。6×9判としても、実際より大写しとなっているので、そうしたところに疑問を呈しないよう、すべてをハッキリ明記して欲しい。朝の 대기の中に浮かぶ富士山はキリッとした崩れのない雰囲気を保って明けて行く。調子、色調は及第、構図のみ、少し余裕がありすぎるのを考えたい。



入賞

黎明 大戸 康世（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

落ちついた雰囲気、山々の重なり合いの合間に市街地が見えないのが成功への元であろう。ただ、データの撮影日が1月なのか11月なのか、線が2本になっているので判然としない。富士山の積雪の状態が多分1月のものと思われる。柔らかさを表現するにはこの露光値でよいと思うが、やはり富士山の色づきが露光オーバーとなって、ちょっと気のぬけた赤であること、それとやはり「お子様お絵描き」の中心線上の富士山になってしまった。もう少し、右を切って左へのぼすことが必要であろう。

入賞

桜咲くかなたに 宮地 広之（東京都世田谷区） 百蔵山



白簾史朗氏講評

右上部から下部一面にサクラの花を配し、左奥に富士山を置く手法は手慣れたものといえるが、出来得れば、もう少しサクラの花むらが密であり、富士山までしっかりとピントが合ったものが欲しかったが、今年の百蔵山の部にはそれに見合う作品がなかった。百蔵山々麓のサクラは若干多くなっているが、山頂付近のサクラは年々衰えていることを思えば、これでも良しとしなければならぬかも知れない。市当局の観光施策をもう少し地域振興に寄与するよう考えてもらわないと、百蔵山が駄目になってしまう。



入賞

岩殿の春 長谷川 政雄（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

このところ岩殿山のサクラも高齢化して、年々花が少なくなっていると聞  
くが、この作品はあまりそのようには見えない。やはり地元作家の強味であ  
ろうか。最適のシーズンを狙ってのものであろう。天候も快晴、春という  
には硬調でちょっと強すぎる感じさえある。16点という、これまでにな  
い多数の応募だったが、やはりアプローチの便利さが有利に働いただけ  
のことか、この作品のほか、推薦は別として、あまり見るべき作品がな  
かったのは残念であった。

入賞

夕日と雲の競演 愛澤 和弘（埼玉県所沢市） 高畑山



白簾史朗氏講評

どうしたわけか、高畑山の作品は朝と日中のものが少なく、いつも夕方の光景ばかり集まってくる。選者が最初に夕景を発表したせいでもなかろうが、もし、そうしたことが影響しているのなら改めてもらいたいものだ。だが、この作品は夕方の光景ではあっても雲間をもれる光芒が生きて、なかなかの感じを出している。締切日ぎりぎりの撮影での駆け込み応募ではあるが、それが初入選となったのは苦勞した甲斐があった。やはりクリスタル印画に仕上げたら、もっと状況を忠実に表現できたろう。



入賞

夕雲映える 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

この題名も「夕雲(ゆうぐも)映える」が元の題名だったが、夕雲は上記のように読まない。「せきうん」となるので感じが出ないので選者の方で変更した。思い切ったのアップで大きく表現したが、少々メリハリが欠けてしまったのは、やはり印画選択のせいで、これまたクリスタル印画であったらもっと調子は美しく仕上がったと考える。構図上はさして難がないが、自分の作品の価値をぎりぎりまで絞り出すための手段も考えに入れた方がよいと思う。だが、ここからの日没後の下山は大変だったろうと同情をする。

入賞

荘厳の夜明け 北沢 清行（長野県松本市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

富士山にはやはり雪がついていないと感じが出ない。最近降雪が少なく、それも時期が遅れて降るので根雪が付きにくく、おまけに強風で飛ばされて山肌があらわに見える。この作品は珍しく充分の積雪があつて、いかにも富士山らしい感じが濃い。九鬼山は最近、手前の植木の梢や枝がのびて、なかなか撮りにくいですが、それにしてもこの作品はうまくカバーしている。左下方の伐採地が少々気になるがこれは致し方あるまい。堂々として、しかも美しく焼けた富士に乾杯！

入賞

湧雲上に座す 瀬瀬 浩恭（岐阜県多治見市） 高川山



白簾史朗氏講評

「湧雲・・・」という形容にちょっと首をかしげるのは、雲の形状が湧き昇るといったものでなく、安定してしまっているからである。いっそのこと、この雲が、画面の下部全体を覆ってくれたら、もっとすばらしい作品になっただろうと思う。そうすると左下方の演習地も消え、富士本来のすばらしさが表出されたい。だが、光の当たった右半面と右上隅の雲をうまく生かして、富士山頂を左に寄せた手法は安定したもので、作者の不断の精進がもたらしたものといえる。撮りにくい高川山の午後の富士をよく撮りこなしたといえる。



入賞

赤雲の彼方に 中川 仁志（静岡県富士市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

朝の色づいた雲の中に、邪魔になる山々をうまく隠した単純化はなかなかのものである。普段は富士の前景に三ツ峠山の一部が写りこんでなんとなくうるさいのが、こうなると実にすっきりしている。たしか初応募で初入選だったと思うが、この調子でぜひ応募を続けてもらいたいものだ。難を言えば、構図上の単純化に加えて、もう少し画面に無駄のないよう、トリミングの必要がある。左方と上部が少し甘いのを切り捨てることによって、この作品はさらに上位に進んだと思う。

入賞

清八の朝 瀬瀬 麻實（岐阜県多治見市） 清八山



白簾史朗氏講評

夜明け直後の浅黄の空に富士山ひとつ、何ものにもさえぎられず、突兀として聳えている。まさしく典型的に単純化された富士であり、三角構図そのままである。もともと富士山をはじめとして、山岳は三角構図を原型としてのバリエーションであるが、これまでの単純化はなかなかとり難い。それには早朝の大気の色づきが大きくあずかっている、その微妙な変化が単なる単純化でなくしているのである。女性、と言っては失礼だが、これだけ大きい表現はなかなかにとれるものではない。やはり、無心無欲がもたらした結果と思う。

## 総評

審査員長 白籟史朗

例年、1月となると「秀麗富嶽十二景」のコンテストのことがとても気にかかる。ことに昨年は稀にみる天候不良の年で、十二景富士山の撮影には相当の苦勞があっただろうと推察できたからだ。それに加えて、最近のデジタル写真の流行で、やれ何百万画素だ、1200万画素だの宣伝に釣られてのデジタル作品の応募が、この聖域ともいふべき十二景の富士山応募にも進出して来はしまいか、ということであった。だが、案ずるより生むが易く、デジタル写真の混入は一点もなく、さすが、銀塩フィルムの描写に精通している方々であると、大いに意を強くしたものだ。

コンテストの審査は、恒例によって、1月19日、大月市役所3階特別会議室に於いて、午後1時30分に開始された。本年の応募者数は54名、昨年より13名減であり、応募作品数も322点、から270点と後退した。昨年の不景気の影響もあろうが、選者としてはこの十二景コンテストの水準が一年ごとに上昇していることの方が大きいと考える。誰しもコンテストには入賞したい、そして自分の作品に少しでも自信があれば応募するようになるのは必然であり、そこで落選すると大落胆して、以後の応募を取り止めるか、このコンテストの選者は作品を見る目がない、などと決めつけるのが常だ。したがってコンテストの応募人数、応募点数に毎年の上下があるのは、たとえどのようなコンテストであっても当然のことであり、要は数ではなく質であるということを理解しなければならない。

今回にしても、この54名、270点の中から選出される作品は十二の山頂が各1点、それと最優秀賞1点、推薦2点、特選3点が加わっても僅か24点である。数で割ると11.2点につき1点の選出となる。それが山頂によって応募の数が異なり、今回も1番山頂・雁ヶ腹摺山が38点、3番山頂・大蔵高丸が31点、11番山頂高川山が24点、5番山頂・奈良倉山が23点、7番山頂・百蔵山が22点、8番山頂・岩殿山が21点の応募があり、その他扇山が16点、清八山が14点、ハマイバが13点、あと残りの山頂は9点から8点が3山、7点が1山、6点が1山、5点が3山という内訳になる。小金沢山に至ってはただの1点しかなかった。

だが、幸いなことに今回の応募作品のレベルには昨年を凌駕するものがあり、最優秀賞、推薦、特選はすばらしいものばかり、各山頂の作品も例年より高度の作品が揃ったことはまことに喜ばしい。たった24点の入賞作品に選出されるまでの熾烈な争いは選者をして、いっそ全部入選させたい、と嘆かせるほどのも



ので、また一方では嬉しい悲鳴でもある。

最優秀賞は、過去に特選1回入賞3回の三浦義朗氏が初の栄冠を手にした。推薦は入賞5回の小谷哲朗氏が2度目の推薦。同推薦は2度目であり過去特選1回入賞11回、昨年最優秀賞の天野昭吾氏。特選3名は一昨年最優秀賞の筒井章氏が獲得、氏は過去入賞も手中にしている。次いで最優秀賞、特選各1回、入賞6回の高橋利延氏が2度目の特選、残る一人は昨年初入選を果たした山崎勝孝氏であった。

こうしてみるとやはりベテランが上位を占めたが、入賞のほうも天野昭吾氏、八巻長子氏、高津秀俊氏、帯金晃氏、瀬沼茂雄氏、大戸康世氏、宮地広之氏、松本邦弘氏、北沢清行氏、瀨瀬浩恭・麻實夫妻の方々がそれぞれの山頂を獲得した。しかし、本年度の大きな収穫として、初の入選を果たした人たちが、7名もいたことである。谷口一只、村上敏幸、夏目政俊、桜井良樹、長谷川政雄、愛澤和弘、中川仁志の各氏の方々であるが、谷口氏はアプローチも表現も難関である牛奥ノ雁ヶ腹摺山、村上氏も同様の小金沢山、夏目氏はハマイバ、桜井氏は奈良倉山、長谷川氏は岩殿山、愛澤氏は高畑山、中川氏は本社ヶ丸と、それぞれ表現しにくい山頂からの作品で栄冠を射止められたのはこれからが非常に楽しみとなった。過去に応募され、何回か入選を果たされた方たちの中で、今回応募のなかったのは藤本紘一、流石匠、竹田辰巳、井上和夫、広瀬雅英、丸山敏章、佐野和彦、加藤公男、高村茂、松里房子、遠藤潤、天野喜夫の各氏である。過去最優秀賞5回、推薦1回、特選2回、入賞6回の奈木正次氏は後進に道を譲るため、応募を中止されている。

今回、惜しくも入選を逸した方々は池田浩樹、石川厚志、伊藤恵子、伊藤茂、海野淑子、大内京子、大貫正一、影山浩、梶原誠、片瀬忠、加藤泰郎、草間健次、小池満雄、小谷加代子、小林三千蔵、小林博、権正光夫、坂本恒義、佐藤知津夫、椎名義春、高橋英子、多田實、谷崎耕史、出山茂雄、内藤均、内藤元次、根岸光子、山下政明、山田岑士、山本まりよ、横澤寛幸の各氏ら31名であるが、やはり各山頂でのせめぎ合いで惜しくも涙を吞まざるを得なかった。その中で伊藤恵子氏の白谷ノ丸からの作品は非常に力強く、ぜひ加えたかったが、本年から白谷ノ丸は大蔵高丸とハマイバに近接しすぎであり、悪しき慣例であった参加を中止することになったため、落とさざるを得なかった。また、十二景の趣旨にそぐわない魚眼レンズによる作品4点で応募をした人もいたが、これも以前から厳重注意してきたことから除外した。

さらに次回からは大月町真木のお伊勢山を8番山頂に加えることになったので、ご承知おき頂きたい。それと応募票書式的大幅変更もあるので、充分心してほしい。